日本タバコ会社　　連載４

財産省

　金井からの電話を切ると、官房長の吉本は、思わず口走った。
「あの人は、自分を何様と思っているんだ。フロックで次官になっただけなのに」
吉本は、東都大学法学部出身である。金井に義理立てする必要などない。次官経験者とはいえ、金井には、まったく力がない。所詮、経済学部出身者は、財産省では亜流である。
　しかし、自分も含めた後輩たちの人事のことを考えると、金井のことも、ある程度は考えざるをえない。次官ＯＢの天下り先が貧相では、その後に悪影響を与えかねないからだ。ただでさえ、最近のマスコミは天下りのことを目の敵にしている。
　天下りという制度が、国の財政赤字をつくった元凶のように主張するマスコミや評論家も多いが、財政赤字の元凶は、地方選出の政治家であることは明らかである。
　不必要な道路や、建物をせっせと建設してきたのはあいつらではないか。吉本は、明らかに無駄と思われる予算要求を何度もつっぱねてきた。しかし、そのたびに政治家たちによって覆された。夜中に電話がかかってくることもまれではない。
「このままお前がつっぱれば、家族の命は保障しない」
こんな脅しを受けたことも一度や二度ではない。
　予算に無駄が多いことは、役人ならば誰でも知っている。誰も、喜んで借金を抱えようなどと思ってもいない。すべて、地元利益優先の政治家たちが招いた結果である。まあ、そのレベルの低い政治家を選んだのは、ほかならぬ国民ではあるが。吉本は、自業自得という言葉を思い出した。
　多くの役人は、安い給料で身を粉にして働いている。少しは、余生にご褒美があってもいいではないか。もし、それがなければ、誰も役人になろうなどとは思わないであろう。それにもかかわらず、おいしい天下り先はどんどん少なくなっている。
　吉本は、権藤のことを思い出していた。実は、吉本は権藤スクールの出身である。権藤は、財産省時代に、多くの後輩から慕われていた。権藤はあくが強く、強引なところもあったが、その政治家操縦術は実にうまかった。
　役人にとっては、所管官庁の大臣のために国会答弁書を書くことが大きな仕事のひとつであるが、権藤は、その天才でもあった。財産大臣には、ろくなものがならない。漢字も読めないので、いつもルビを振っている。しかし、権藤が書いた原稿は、どんなにバカな大臣でも、まごつかずに読むことができた。いつしか、後輩が権藤のもとを訪れ、その教えを請うようになった。そして、誰からともなく権藤スクールという一派ができあがった。
　スクールの出身者は、権藤が省内で権力を強めるにつれ、しだいに勢力を伸ばしていった。もちろん、もともと東都大学法学部出身者であるから、出世コースは保障されている人間ばかりではあったが、強い後ろ盾があるということは心強い。そして、権藤は、事務

次官まで登りつめた。
　吉本は、今回の権藤の発言の真意を測りかねていた。権藤は、本当に自分の地位を守るためだけに、財産省からの天下りを拒否すると宣言したのであろうか。もちろん、権藤は権力志向の強い人間ではあるが、後輩の面倒見がよいことでも知られている。今回の自分の発言によって、財産省の後輩は、大切な天下りポストをひとつ失うことになる。吉本は思った。何とか、権藤に直接あって真意を確かめたい。しかし、いまの自分の立場では、それも適わなかった。
　吉本は、次官の山城のもとを訪れた。山城も権藤スクールの一員である。吉本の三年先輩であり、切れ者で知られている。
「次官は権藤社長の発言をどう思われますか」
「私にも真意は分からない。永遠にわが省からの天下りを拒否するつもりなのかどうか。しかし、それが本当だとしたら、由々しき事態となる。ただでさえ、ＯＢの天下り先は減っている。その中で、ＮＴＳの社長ポストは貴重なポストだ」
「先ほど、金井さんから電話がありました」
「そうか。彼も相当あせっているということだろうな」
「そんな感じでした」
「ＮＴＳ社長を三年勤めさせて上がりと思っていたが、そうもいかなくなってきたな」
「権藤社長は、このまま金井さんに社長を譲ったら、ＮＴＳそのものがだめになると思っているのではないでしょうか」
「その可能性もある。なにしろ、金井さんは政治のいたずらで次官になったようなひとだ。次官としての素質や器量は、全くなかった。いま、逆風にさらされているＮＴＳの社長は、到底務まらないだろう」
「とすれば、三年だけ権藤社長が続投して、その後は財産省から天下りというわけにはいかないでしょうか」
「いまのマスコミの反応を見ると、それは難しいだろう。なにしろ、マスコミ全部が権藤さんの味方になっている」
「そうですね。いちばんいいのは、金井さんをはずして、その後は、いままでどおりということなのですが、それは難しそうですね」
　山城は、吉本の立場をよく理解していた。自分も同じポストについていたからだ。
　役所のＯＢは、後輩が、自分たちのポストを用意してくれるものと思っている。しかし、昔とちがって、役人ＯＢのポストはどんどん減っている。
　さらに、最近では、天下り先で問題を起こすＯＢも少なくない。ＯＢには、民間企業が役所の言うことを何でも聞いてくれていた時代に役人生活を過ごした人間が多いので、天下り先で、よくトラブルを起こすのだ。官房長は、その調整もしなければならない。
「ところで、金井さんは、ずいぶん派手に遊んでいるようだな」
「ええ、年金企画財団の野中とつるんで、かなりの金を使っているようです」

金井は、自分の遊興は、後輩にばれていないと思っているが、役人の世界は狭い。すべて、お見通しなのである。
「野中は保健省出身だったな」
「ええ、確か、金井さんとは大学の同期です」
「東都大学経済学部出身で、保健省とは、相当できが悪かったんだろう」
保健省では、医者の免許を持った技官が幅を利かしている。経済学部出身で保健省に入る人間はあまりいない。経済学部が優遇されるのは、経済調査庁だけである。
「実は、野中に関して問題が起きているようなのです」
「それはなんだ」
「財団で働いていたパートタイマーの女性が、野中の公金の乱費をマスコミにリークしたようなのです」
山城の顔が曇った。野中がどうなっても構わないが、その道連れで、金井にも類が及ぶと財産省にも波及するおそれがある。
「この女性は、野中の持ってきた百万円の領収書を交際費として処理できないと言ってつっぱねたらしいです」
「百万円か。決して安い金額ではないな。いったい何に使ったんだ」
「お花代ですよ」
「お花代！おい、それは芸者遊びということか」
「そうです。まあ、いまでは、粋な芸者遊びはできなくなって、お相手は、アルバイトのようなコンパニオンらしいですが」
「コンパニオン！」
「ええ、一〇名ほどを呼んで遊んだらしいのです。しかも、まずいことに、この時の乱痴気騒ぎに金井さんも参加していたようなのです」
山城は、本当に困ったという顔をしている。
「しかし、野中という男も大胆だな。いくらパートに対してとはいえ、堂々とお花代を交際費として請求するとは」
「ええ。しかも、まずいことに、俺の言うことが聞けないならお前をクビにしてやると言って、本当にクビにしたらしいのです」
「それは弱ったな。昔なら、そんな話はいくらでもあったが、最近では世間の目が厳しい。常識のある人間なら、少しは遠慮するというものだろう。それに、百万円程度の金なら、いくらでも他に処理する方法があったろうに」
「自分の権勢を見せつけたかったのでしょう。しかし、年金問題がこれだけクローズアップされている時だというのに、あまりにも非常識すぎます。どうやら、今度の週刊ワイドに出るとの情報もあります。クビになった女性は、テレビ局からもひっぱりだこらしいですよ。顔出しもＯＫと言っているようですからね」
「その女性も相当頭にきているのだろう。吉本君、その記事の原稿を急いで手に入れて欲

しい。それから、金井さんの件だが、ＮＴＳ社長などもっての他だ。その前に、いまの財団もやめてもらうしかないだろうな。うまく、野中のところで止まってくれればいいが、金井さんにまで飛び火すると、こちらにもとばっちりが来る恐れがある」
「分かりました」
吉本は、仕方がないという風にうなずいた。本来、国政にあたるべき財産省の官房長が、できの悪い先輩の尻拭いをさせられる。なんとも、無駄なことだろうか。

役員会議

　佐伯は、会議室の末席に座りながら、権藤がひとりでしゃべりつづけるのを聞いていた。今日は、定例の役員会議の日である。会議とは言っても、名ばかりで、だいたい時間の九割以上を権藤がひとりでしゃべっている。
　あとは、専務の品川が、時折、意見を述べる程度である。権藤が、財産省からの天下りを受け入れずに、ＮＴＳ生え抜き社員を次期社長に据えると宣言してからは、ますますワンマンぶりが目立っている。
　今日も、権藤の一人舞台で会議が終わると思っていた矢先に、末席の広報担当役員の棚橋が手を上げた。佐伯はいったい何が始まるのだろうかと驚いた。
「社長、ひとつお願いがあります」
権藤は、会議で初めて発言する棚橋の方を面白そうに見ている。
「なんだ。話してみろ」
「はい、広報室がいまだに責任窓口となっている喫煙調査室の件です」
「喫煙調査室！そんなものはとっくに閉鎖になっている。いまさら、何だ」
「確かに、調査室そのものは閉鎖になっていますが、まだ、その尻拭いは終わっていません」
「尻拭い。面白いことを言うな」
佐伯は、ふたりのやり取りをはらはらしながら眺めていた。広報室の篠原には、社長に予算を認めてくれるように直訴してくれとは言っていたが、まさか、広報担当役員が役員会の場で権藤に進言するとは思っていなかったのだ。
「はい、尻拭いです。これは、日本煙塩販売公社が行った犯罪と言ってもいいでしょう。そのおかげで、われわれが大変な迷惑を被っています」
佐伯は驚いた。棚橋は、お坊ちゃん育ちで、父親のコネで公社に入った。ずっと、広報畑を歩き続けて、役員になった人間である。完全なイエスマンと思っていたが、そうではないらしい。
「犯罪とはおだやかじゃないな。お前らは、一度も俺にそんなことを言ったことはないぞ」
「いままでの社長は、全員、財産省からの天下りで、腰掛けでした。あえて言う必要もないと判断してきたのです」
「そうか」

「しかし、権藤社長は違います。ですから、ある程度の暗部も知っておいてもらった方が良いと判断しました」
「よし分かった。ここからは、会議の議事録からはずしてくれ」
権藤は、役員会の議事録担当の総務課長に目配せした。そして、棚橋をまっすぐ見た。棚橋は臆することもなく、調査室の実態を権藤に説明した。
「しかし、公社の連中もバカなことをしたもんだな。当事、喫煙が人体に及ぼす影響に関する科学的データは、海外の著名な研究機関から、すでに発表されていたろうに。なんで、わざわざ、そんな実験をしたんだ。」
「おそらく、タバコの害はないと本当に信じていたからでしょう」
権藤は、あきれたというように、クビを振った。
「社長、いまだに恩賜のタバコというものがあるのを、ご存知ですか？」
「聞いたことはある」
「天皇陛下が、ご苦労様といって臣下に、ご褒美として渡すものです。陛下が毒にしかならないものを、自分のために尽くしてくれた臣下に渡すわけがありません。つまり、いまだに宮内庁もタバコの害に対しては、無知だということです。役人出身の社長には、申し訳ありませんが、役人は押しなべて無知です。特に科学知識は皆無といってもいいくらいです」
　権藤は怒るかと思ったが、納得したように棚橋の言葉にうなずいている。
「なるほどな。確かに科学技術立国などと偉そうなことを言っているが、この国で偉くなるのは、みな文系の科学音痴ばかりだ。まあ、他人のことを言えた義理ではないが」
「だから、役人あがりの公社トップは、本当にタバコには害がないと信じていたのでしょう。ところが、実際に実験をしてみると、多くのものが病気で倒れてしまった。それどころか、かなり重症のものまで出てきたのです。しかし、そのデータをそのまま公表するわけにはいきません」
「だから、嘘をついたというわけか」
「厳密には嘘ではありませんが、実際には実験に参加していない喫煙者のデータを使って、タバコを吸っても健康だと報告しています。喫煙者のデータには変わりませんので、完全な嘘ではありませんが、感心できる行為ではありません」
すると、権藤はきっと棚橋を睨んだ。
「役人がよく使う手だな。棚橋君。実は、公社は、もっとひどいことをしているよ。妊婦に対するタバコの影響だ。海外では、すでに、胎児に深刻な影響があることが明らかになっていたにもかかわらず、公社は、深刻な影響があるというデータは統計上得られていないと発表しおった。これで、死ななくてもいい赤ん坊が何人犠牲になったことか」
棚橋は驚いた。そして、権藤のことを少し見くびっていたことを悟った。権藤は、そこまで調べているのだ。
「確かに、人体実験室の秘密はＮＴＳが公社から引き継いだ。公表したら、大騒ぎになる

のも確かだろう。だから、金で解決する。それも分からないではない。しかし、それを社長が正式に認めたらどうなる。それこそ、あとで大騒ぎになる。ひいてはＮＴＳの存続自体を危うくするかもしれない」
棚橋は引き下がらなかった。
「社長。おっしゃることはもっともですが、それでは、金の手当てがつきません」
すると、権藤はうっすらと笑いを浮かべて
「いままでだって、うまくやってきているではないか。なあ、佐伯君」
と言って、佐伯の方を見た。佐伯は、震え上がった。自分が、社長に内緒で勧めてきたことを、権藤は知っていたのだ。
「わたしは、公式には認めない。しかし、佐伯や篠原が問題にならないような処理をすることには黙って目を瞑っている。それくらいの金は何とかなるだろう」
棚橋は、ようやく権藤の意を察したようだ。
「分かりました。それでは、いままでどおりの処置を講じます」
「ところで、人体実験をやったことは、確かに罪ではある。しかし、公表しなかったとはいえ、貴重なデータが蓄積されていることに変わりはない。それを、うまく利用しない手はないだろう」
　佐伯は、権藤の手腕を高く評価していたが、それ以上に、何か空恐ろしいものを感じた。
「いいか、公社がなぜ失敗したと思う。それは、事実を隠蔽しようとしたらからだ。一度、隠蔽すると、つぎからつぎへと隠し事が増えていく。そこからは、何も建設的なことは生まれない。ＮＴＳも同じだ。俺が社長になるまでは、バカの一つ覚えのように、喫煙には害がないと訴えてきた。だから、どうしても対応がいびつになるし、世の中の反感も買う。いまは、インターネットの時代で、海外から、情報がどんどん入ってくる。タバコの健康被害は明らかだ。だったらどうしたらいい。そう。ＮＴＳとしても、喫煙は身体に悪いと正直に認めるんだ。そのうえで、どうすれば会社を維持できるかを考えるべきなんだ」
すると、別の役員が手を上げた。どうやらオフレコならば、発言は活発になるらしい。
「社長。しかし、タバコ販売会社が、タバコの害を認めてしまったら、その存在意義が問われるのではないでしょうか。タバコ会社としては、どんなに科学的データがそろっていたとしても、タバコに害はないといい続けるのが筋だと思いますが」
「発想の転換をしろ。いまは時代が違う。タバコに害があるからと言って、喫煙者がゼロになるわけではないんだ。実際に、嫌煙運動がさかんになった後だって、タバコの売り上げ量は落ちていない。よしんば、消費量が、いまの半分になったとしても、わが社の繁栄は変わりない。何しろ、原価はただ同然の製品だからな」
役員は黙り込んだ。
「いいか、下手に否定すればひとは疑う。逆に、あっさり認めてしまえば、それほど大きな騒ぎにはならない。不祥事が起きた時に、問題がこじれるのは、最初に隠し事をするからだ」

もうひとりの役員が手を上げた。
「それでは、社長に何かいいアイデアがあるのですか」
佐伯は、この役員の次はないなと思った。権藤が日頃から言っているのは、自分達で知恵を出せということである。権藤にアイデアを求めるのは愚の骨頂である。
「ちょうどいい機会だ。わたしの考えを話そう」
そう言うと、権藤は驚くべき計画を説明しだした。
「ＮＴＳにとって、いま何が一番困るか。それは、政府がタバコ税の大幅な値上げを決定することだ。すでに、一箱あたり一〇〇円値上げするという法案を提出しようとする動きもある。総理も、この案には好意的だ。将来的には一箱あたり税金は五〇〇円でもいいくらいだと豪語している。彼はタバコ嫌いだからな。しかし、タバコ税が上がって儲かるのは政府だけだ。わがＮＴＳ社は、大きな痛手をこうむることになる。それに、タバコの消費が下がれば、平均寿命が伸びて、高齢化社会にあえぐ日本にも悪影響があると考えている」
役員は、みな緊張した面持ちで権藤の話に耳を傾けている。これは、事実上の次期社長としての所信表明と考えてよい。
「なぜ、値上げしようとしているか。それは、タバコによる健康被害が甚大だと多くのひとが考えはじめたからだ。タバコの弊害による医療費負担は年間七兆円などという見積もりもある。だから、その分を税として徴収しろという発想だ。特に、非喫煙者にとって受動喫煙で健康が侵されるということは我慢のならないことだろう。わたしもタバコの煙が嫌いだから、その感情は良く分かる。しかし、ここで考えてもらいたい。非喫煙者は、喫煙者がタバコを吸うこと自体に文句があるわけではない。煙が迷惑なだけだ」
佐伯も、タバコの煙が苦手なので、権藤の考えはよく分かる。確かに、喫煙者がタバコを吸うのはなんとも思わない。ただ、煙がいやなだけのことだ。もちろん、喫煙者には、タバコ独特の嫌な臭いがこびりついているが、それもそばに近寄った時に気になるもので、一メートルも距離があけば気にならない。
「しかし、この副流煙の問題と喫煙の問題が一緒くたにされているのが現状だ。だから、わたしは、完全分煙を勧めようと提案している。つまり、喫煙者がタバコを吸っても、その煙を非喫煙者が吸わないようにする。こうすれば、タバコに対する世間の非難は、かなり沈静化するだろう」
佐伯は思い出した。実は、同じようなことを、ＮＴＳの企画部門が考えたことがある。そこで、登場したのが、ミニスカート姿の案内嬢を乗せた喫煙号だった。路上禁煙の地区に出かけていって、喫煙者が自由に喫煙できる場所を移動車で提供する。車には、排煙設備も完備されているので、喫煙者、非喫煙者、双方から好評だ。しかし、問題は、そのコストである。一日に百人が喫煙号を利用したとしても、タバコの売上高はせいぜい数万円にしかならない。人通りが少ない地区では、売り上げはもっと低くなるだろう。これでは、人件費を考えると、喫煙号を導入すればするほどＮＴＳは大幅な赤字になる。

「そこで、なんとか政府に働きかけて、完全排煙設備の整った喫煙所を全国に完備させたい。それが、わたしの悲願であり、ＮＴＳが生き残る道だと考えている」

佐伯は、最近の権藤の動きをみて、権藤が持っているＮＴＳの将来像が分かったような気がした。確かに、完全分煙が実現すれば、喫煙に対する非難は、かなり沈静化するだろう。しかし、そのためには、喫煙所を全国に設置する必要がある。その数は、とてつもない。そして、莫大な予算が必要になる。とてもＮＴＳ一社で賄える金額ではない。権藤は、それを政府に出させようとしているのだ。

そして、思った。権藤が、喫煙派と禁煙派の有力議員に面会して、国会を完全分煙にしようと働きかけたのには、いずれ、政府の予算で、日本全国に完全分煙を目指した喫煙所を設けようという意図があるのだ。確かに、これならば、ＮＴＳ社が将来永劫生き残っていける可能性はある。

佐伯の過去

実は、佐伯自身はタバコの煙には弱い体質である。小さいころは喘息がちで、タバコの煙を少し吸っただけで大変な発作に襲われた。しかし、大人たちは、まったく気にするそぶりを見せなかった。タバコの煙が喘息の原因になるなどとは、当時は、誰も思っていなかったからである。

佐伯は、喘息の発作が出た時、自分がそのような体質に生まれたことが悪いのだと自分を責めていた。当時、成人男性の喫煙率は八〇パーセントを優に超えていた。つまり、当たり前の人間ならば、タバコを吸っていたのである。客が来れば、灰皿を出す。それが常識であった。

この異様な喫煙率の高さは、政府の方針と密接な関係にある。明治の初期は、タバコ販売は民間のものであった。しかし、政府は、戦費に当てるために、タバコ販売を国の直轄事業としたのである。そのうえで、富国強兵策として、兵士を高揚するためと称して、ただでタバコを配った。タバコが兵士の戦闘能力を高めると誤解していたのだ。科学的データもなく、感覚だけで、政治を進めていた時代の誤謬である。

喫煙習慣のないものは、最初は、タバコを他人に譲っていた。しかし、次第にもったいないと思うようになり、自分たちも吸うようになった。当然、ニコチン中毒になり、全員がチェーンスモーカーになる。国が率先して、中毒患者を増やしてきたのだ。タバコを国民が吸えば、それだけ国の収入も増え、軍備増強ができる。国民の喫煙率が異常な上昇をみせたのも、背景には、このような国家戦略があったのである。

天皇陛下が、自分のために働いてくれた臣下に、恩賜のタバコを配るのも、このような背景による。しかし、後進国に一致した傾向であるが、日本男性の喫煙率は異常に高いにもかかわらず、女性の喫煙率はほぼゼロに近かった。中国や韓国などの文明後進国でも、日本と同じような傾向にある。

佐伯は、不思議に思っている。もしかしたら、タバコは嗜好品だから、女などにはもったいないという女性蔑視の思想が背景にあったのかもしれない。しかし、一方では、女性は本能で喫煙に対する抵抗があったのかもしれない。昔は、タバコを咥えるような女はあばずれと決まっていた。女性は、子供を生まなければならない。最近の科学データを見ると、喫煙行為が胎児に及ぼす影響は深刻である。奇形や先天的疾患の発生率は、母親の喫煙行為によって異常に高まる。しかも、生まれた後でも、喘息や突然死の原因となっている。つまり、女性は、本能でタバコを遠ざけていたとも言える。

ただし、昔はタバコの害への認識がなかったために、受動喫煙の問題は深刻であったろう。母親が喫煙しなくとも、父親が一日中部屋でタバコを吸っていれば、子供に対する悪影響は避けられない。

佐伯は、小さい頃にタバコの煙が大の苦手であった。それにもかかわらず、日本煙塩販売公社に入ったのは、それだけ公社の存在が大きかったからである。佐伯の生まれ故郷は、東北地方の県庁所在地である。いくら頑張っても、夏の冷害で米が収穫できない年もあった。そこで、政府がはじめたのが、稲からタバコへの作物転換である。タバコは、稲ほど難しくはなかった。もともと、地元には大きなタバコ工場があり、地方の雇用を支えていた。

タバコ工場の工場長は、地元の名士で、何か行事があれば、必ず挨拶にやってきた。佐伯も小さい頃から、タバコが地元や自分の家の生活を支えていることを感じていた。しかも、当時は、喘息の原因がタバコの煙であるなどということは一般市民には知らされていなかった。たとえ、知らされたとしても、タバコなしでは生きていけない地方都市にとっては、貧乏人の子供が喘息で苦しんでいることなどまったく問題外の話だったのである。

産業のない地方都市に生まれた佐伯にとって、農業以外で生計をたてるには、日本煙塩販売公社に入る以外なかったのだ。だから、佐伯も、一生懸命、勉強し、地方の国立大学を出たあとは日本煙塩販売公社を目指した。父の友人の地元選出の国会議員のコネで、佐伯は何とか公社に入ることができた。爾来、三〇年近く、公社と、その後身のＮＴＳに勤めているが、佐伯はタバコを吸ったことがない。